作品が語りかけるもの

◆問い合わせ　障がい者係
☎ 093-293-1296

線や点、形、色で描かれる芸術。描き方もその受け取り方も、芸術の世界に正解はありません。目の前にある作品から、制作者のまなざしや息づかいを感じ取ったとき、私たちはごく自然にその人と心を通わせます。

遠賀町で精力的に創作活動を続ける斎藤 龍樹さん。彼のペンで描かれた緻密で力強い線は、見る人の心をそっと揺さぶります。

そんな作品の数々が語りかける「個性」や「生き方」に魅了され、斎藤さんの日常を訪ねました。



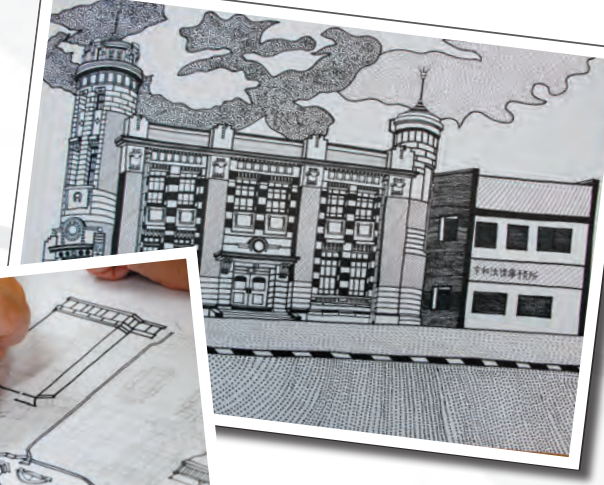
Artist Profile

斎藤 龍樹
- さいとう りゅうじ -

障がい者アーティスト。遠賀町松の本在住。2011年、東日本大震災をきっかけに福島県から遠賀町へ。北九州市若松区にある就労継続支援B型事業所「My夢（まいむ）」へ通所中。マーカーを使用した模写作品を得意とし、福祉施設での展覧会開催やアートレンタル出展などを多数実施。「きょうされんグッズデザインコンクール」など入賞経験多数。昨年は、第25回全国障害者芸術・文化祭「全国障がい者作品展～アール・ブリュット展～」への出展作品として選出された。

主な受賞歴

・「第５回北九州市障害者芸術祭」**理事長賞**（2012）
・「第11回北九州市障害者芸術祭」**実行委員長賞**（2018）
・「トラ・寅・TORA」アート展　**優秀賞**（2021）
・「第17回北九州市障害者芸術祭」**実行委員長賞**（2024）
ほか





北九州市にある就労継続支援B型事業所「My夢（まいむ）」の絵画クラブで創作活動に励む斎藤さん。斎藤さんの代名詞ともいえるのが、白い紙に黒のマーカーやボールペン、鉛筆で描く白・黒を基調とした絵です。

定規などは一切使わず、鉛筆で下描きをした後、マーカーなどで一気に仕上げるスタイルは、絵画クラブで指導してもらっている藤尾 修二さんとの出会いがきっかけ。My夢への通所をはじめとした、さまざまな巡り合わせが、彼の才能を大きく開花させました。その緻密な線や点は圧巻のひとことです。

さらに、近ごろは水墨画や色彩を取り入れた絵にも挑戦しており、表現の幅は広がり続けています。



両親と暮らす自宅の和室には、父が集めた仏像を模写した「仏画」が並びます。月に１作品のペースで自ら制作日を決め、丸１日かけて一気に描き上げる。その集中力は、食事の声をかけることもためらうほど凄まじいものです。

「見たままを描くようにしている」と語る斎藤さんが特にこだわるのはその「表情」。優しい顔を正確に表現するよう細部まで注視し、作品を仕上げます。

両親いわく、普段は「とてもきっちりした性格」だそう。ルーティンや物の位置にこだわりがあり、また、両親に頼ることなく計画的に、自ら貯めた工賃で一人旅へ出かけることもあるそうです。

遠賀町へ移住した当初は、これほど絵の才能があるとは両親も気づいていなかったそうです。

「障がいがある子を持つと『普通とは何か』にとらわれ、親自身がその考えに縛られてしまうことがある」と振り返る父 利幸さん。「普通なんて人それぞれ。幸せに楽しく生きていけるようサポートしていく」と、温かいまなざしを注いでいます。

斎藤さんに今後はどのような作品を描きたいかと尋ねると「次はこの仏様の絵」「フジテレビの建物が描きたい」など、目標が次々に語られ、今後の作品も楽しみになりました。





「いろんな出会いや創作で息子の新しい一面に出会うことができました。他にも才能があるかもしれない。これからも楽しみです」

◀ 父：斎藤 利幸さん



「彼の描く線がものすごくきれいだったので、色を付けずに描くスタイルを勧めたんです。私にも、とてもマネできませんよ（笑）」

絵画クラブ指導者：藤尾 修二さん ▶

斎藤さんの作品が語りかける言葉に耳を傾けてみると、私たちの日常には、目には見えない、人それぞれの色やリズムがあることが分かります。絵の感じ方に正解がないように、個性や生き方、表現方法もまた一つではありません。

作品の声に耳を傾けるように、他者の心を感じ取ることは、互いを知り、認め合い、共に暮らしていくための、大切な一歩となるのではないでしょうか。